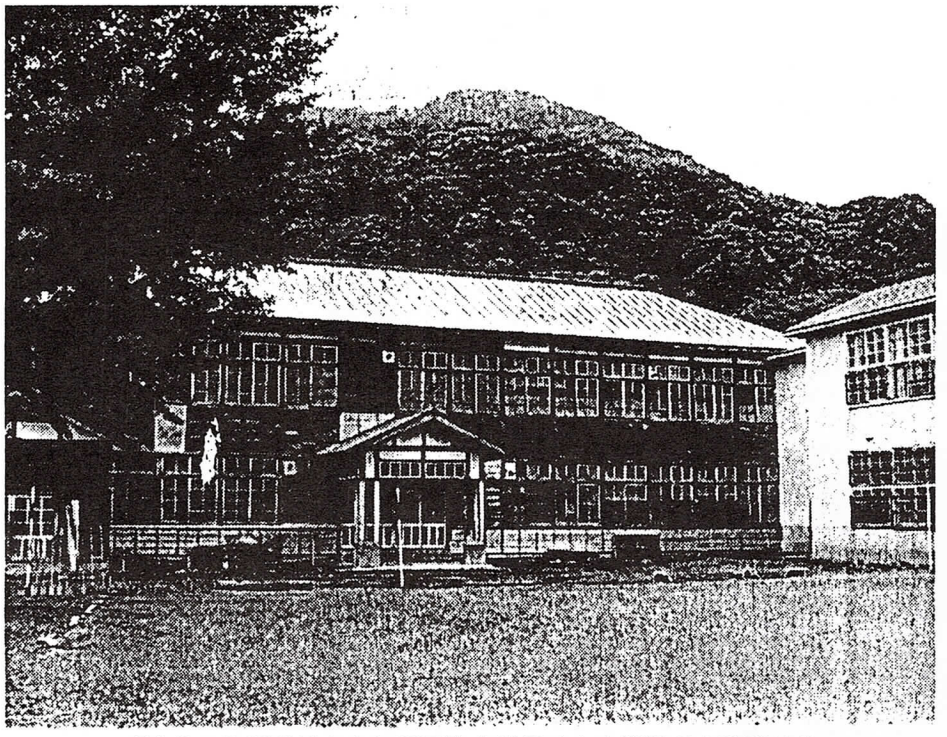
木造廃校舎を文化発信基地に

周縁の会津から世界へ向かって

山口昌男

1992(H4).8.1

文化



「文化の発信基地」として再生させる喰丸小学校の木造廃校舎

「文化の発信基地」として再生させる計画の木造廃校舎は、福島県の南西部、会津若松や会津田島などに隣接する大沼郡昭和村にある。学校の名は、喰丸（くいまる）小学校。昭和村は昭和二年、二村が合併してできた人口三千人ほどの過疎村で、鉄道がなく、冬になると豪雪に閉ざされて村に通じる道は一本だけという東北の典型的山村である。

地理的な周縁性に加えて、昭和村には「戊辰（ぼしん）の役古戦場」や「官軍九人の墓」などがあり、幕末には政治的にも周縁化されたところでもある。文化情報の独占的発信地ともいえる東京と比較すれば、多くの位相において周縁の地であるといえよう。

そんな文化の異境に、文化拠点をつくることにした理由は何なのか、なぜ、昭和村なのか、という質問をよく受ける。実は、私と昭和村との出合いはまったく偶然で、わが家を埋め尽くしてしまった書物を収める書庫を建てる場所を探していたところ、友人がこの村にいい地所があると紹介してくれたのが直接のきっかけだった。

喰丸小学校の木造廃校舎は、そのすぐ近くにあった。聞けば十年ぐらい前から廃校になったままで、近く取り壊される予定だ、という。

さっそく出かけてみて、びっくり。紹介してもらった土地は小高い丘の突端にあり、山なみの美しさに加え、眼下には田園風景が広がって、ロケーションがとてもいい。南画の仙境を見る思いがして、一発で気に入った。

喰丸小学校の木造廃校舎は、そのすぐ近くにあった。聞けば十年ぐらい前から廃校になったままで、近く取り壊される予定だ、という。

イチョウの大木が校庭の真ん中にそびえ、周りは田んぼで、裏山には神社があった。小学校の原風景がそこにある、という感じがした。

「木造校舎だから残すだけでも意味がある」。そう思い立って、村長と助役と教育長を相手に三日間、朝から晩まで酒を飲み、取り壊しを思いとどまるように説得した。生涯学習に使うことを確約して、廃校舎を譲り受け、「文化再学習センター」という文化の発信基地をつくることが決まった。

出合いは偶然だったが、私の中学校（北海道）の恩師が喰丸小学校の元校長の叔父だったり、この話が浮上したのが「挫折の昭和史」を執筆中の出来事だったり、幕末維新の研究をしている最中だったり…、因縁めいた話が次々に出てきて、次第にこの小学校を取り巻く神話的な力を感じるようになった。周縁の地の「縁」たる山縁（ゆえん）だろうか。

具体的にここでやることは、旧盆の八月十三日、友人の井上ひさし氏が山形県川西町で開いている「遅筆堂文庫生活者大学校」の分校を開くのを皮切りに、交友関係のある国内外の思想家や芸術家を招き、映像、演劇、美術、音楽、講演、シンポジウムなどのイベントを随時企画する。

地域の人たちに喜んでいただくことはもちろん、心身ともに疲労した都会人をここに連れてきて、密度の濃い「気」に触れてもらい、セラピーの場とすることも考えている。もし、聴衆が一人もいなくても、田んぼの水や森の木や土の中のカエルと対話する、それでいいじゃないかと考えている。

多分、こうした試みの一つひとつが、東京を人生やキャリアの終点、文化情報の独占的発信地としての重荷から解放し、文化的武装解除を促す力にもなると思う。

もしかしたら、昭和村に海外の友人のガルシア・マルケス氏やオクタビオ・パス氏などノーベル賞の受賞者がやって来るかも知れない。大江健三郎氏や住井すゑ氏が来るかも知れない。そうやって、文化の中心を東京から昭和村に少しずつずらし、そこから国際社会に向かって文化の情報発信をしたいのである。栗の木の香りと霊気に満ちたこの村から…。

同校舎の入り口に立つ筆者

【やまぐち・まさお氏】一九三一年、北海道生まれ。東大文学部卒。都立大大学院で文化人類学専攻。東京外語大アジア・アフリカ言語文化研究所教授。道化論、祝祭論、記号論などで知られる。漫画、演劇、映画の分野でも活躍。著書に「文化と両義性」「道化の民俗学」「文化の詩学」など。本紙書評委員も務めている。